

## 『高野聖』の「天生峠」

## 一 はじめに

『高野聖』は、『照葉狂言』『湯島詣』などと並んで、泉鏡花の名作の一つに数えられている。初出は、一九〇〇（明治33）年二月（『新小説』）である。

高野山の僧「宗朝」が、「私」に若き日の思い出を語る物語である。宗朝は、飛騨から信州の松本へ抜けようとして「天生峠」<sup>あまふたうげ</sup>に入った時、一三年前の大洪水の生き残りだという女が住む一軒家に宿を借りた。裸身となって水浴を介助してくれた彼女の艶なる美しさ、漂う魅力に心を奪われるが、翌朝には再び修行の旅へと宿を辞した。下山の途中、彼女の世話をしている老爺「親仁」より、彼女が不思議にもその色香に迷った男を森のさまざまな動物に変えてしまう魔力を持つ女であり、昨夜彼女にまとわりついた動物

愛 知 峰 子\*

は、そうした男たちだと明かされた。宗朝は、危うく難を逃れたというのである。

山奥の一軒家、たどり着いて安堵したのもつかの間、そこはなんと妖女の住む魔界であった。まさに鏡花独特の幻想的怪異世界である。物語の主要部分をなすがゆえに、従来、その魔界が何を意味するのかが注目され、民俗学的見地などからさまざまに読み解かれてきた<sup>①</sup>。ところが、奇妙なことに、そのありうべからざる幻境の舞台「天生峠」は、全くの虚構ではない。その名称が存在した、つまり同名の峠が実在したのである。当然、両者の関係性が疑われるわけであるが、一般に、その同一性は認められていない。地理的に矛盾があるとき、実在の天生峠<sup>あまふたうげ</sup>は、名称こそ同じであつても、『高野聖』の舞台としては疑問視されている。

たとえば、川口久雄氏は、「強いて今日の地理に当てれば飛騨

の高山の東、平湯越えの安房峠から上高地へ出て島々谷へ出るか、乗鞍の南麓の野麦峠あたりが該当しそうです」と安房峠または野麦峠の方がふさわしいとされつつ、作中の峠は実在するものではないと指摘された<sup>(2)</sup>。

作品の中の旅僧は「参謀本部の絵図面」を按じて歩くことにはなっていますが、こういう作品の地理は現実にはどこにもありません。結局鏡花世界独特の「神変不思議」が妖しくも創り上げた架空の天地です。

天生峠はどこでもよかったのでしょうか。近代アルピニズム以前の自然のうけとり方、呪術的な自然崇拜と因果宿報の世界観から、飛騨の山国の神怪の象徴として「天生峠」は明治文学のなつかしい記念碑として聳え続けるのでしょうか。

作中の「天生峠」は、単なる「山国の神怪の象徴」であり、実在の天生峠とは無関係の、どこにもない「架空の天地」として創り上げられたもので、峠は「どこでもよかった」というのである。

たしかに『高野聖』は虚構の物語である。妖しい非現実的世界を描き、作中の「天生峠」は、地図上に認められないような位置に描かれている。だが、それでは、なぜ、「天生峠」という実在の峠の名称が用いられたのだろうか。

知られているとおり、鏡花は、天生峠について、友人吉田賢

竜の旅した体験として聞いたことがあるという<sup>(3)</sup>。「麻を刈る」(二九二(大10)年九—一〇月)には、次のように記されている。

閣下穂科信良は(中略)一夏は一人旅で、山神を驚かし、蛇を踏んで、今も人の恐るゝ、名代の天生峠を越して、あゝ降つたる雪かな、と山蛭を袖で拂つて、美人の孤家に宿つた事がある。首尾よく岐阜へ越したのであつた。

穂科(吉田賢竜<sup>(4)</sup>)は、鏡花の故郷金沢から上京するのに、蛇や山蛭に遭遇し、難儀しながら天生峠を越えた。それから美しい女性の住む一軒家に宿泊した。その後、松本方面ではなく岐阜の方へ南下したのであるが、天生峠での女性との出会いは、まさに『高野聖』に描かれた宗朝の体験に投影されている。

鏡花は、実際の天生峠の存在を吉田から伝え聞いて詳細に知っていたといつてよい。「どこでもよかった」わけではなく、やはり、実際の天生峠を題材として描く意図があつたのではないだろうか。

## 二 実在する天生峠

周知のように、実在の天生峠は、富山県境の岐阜県大野郡白川村荻町から同県飛騨市河合町天生へと越える峠である。荻町から保谷川沿いに上り、ソウレ山と初糠山の鞍部が頂上である。周辺

にいくつかの滝があることも知られている。現在は、舗装された国道三六〇号線が通り、自動車での通行が可能である。道筋はかつての天生街道そのままではなく、整備されているが、今も山深いことには変わらない。積雪のため冬季は閉鎖され、落石や雨のため通行止めになることもしばしばである。<sup>⑤</sup> 峠の標高は、飛騨地方の峠として最も高い。標高一二九〇メートルと記す碑には、『高野聖』ゆかりの地であるとも記されている。その南面、二キロメートルほどのところには天生湿原、ブナ原生林が広がり、県立天生自然公園とされて夏季には見学できる。秋の紅葉も美しく、多くの人が訪れる観光地となっている。

このような峠も、明治期は、まだ、幕府時代からの街道をそのまま受け継いだ険しい山道だった。整備は進まず、牛による輸送が中心で、頂上にはお助け小屋があったという。<sup>⑥</sup>

中村泰三の「白川観光録」<sup>⑦</sup>には、実際に天生峠を旅した記録が含まれている。明治四三年七月の旅で、『高野聖』にほぼ一〇年遅れているが、明治期の峠の様子をうかがうことができる。

著者の中村泰三は、岐阜県古城郡書記として、白川地方調査のため「白川観光団」に加わった。団長は、上院議員杉下豊であった。ほかに、文部省美術審査会員高島北海画伯（スケッチ担当）、岐阜県会議員・史家岡村利平（中村の実兄）、古城郡会議員山崎杉嶺（産業、交通の視察担当）が参加している。中村は、「風光風俗」の記録を担当した。

一行は、土用太郎（七月二〇日）に、高山（岐阜県高山市）を

出発した。牧ヶ谷から清見に出て、荘川經由で白川村に入り、二六日朝、鳩ヶ谷から天生峠を越えて同日夕刻角川（現河合町）に至った。調査は、経路周辺の自然、点在する集落、人々の暮らしなどに及んだようであるが、「白川観光録」は、一行が折に触れて詠んだ和歌や俳句も織り交ぜた紀行文に近い記録である。

これによれば、調査団一行は、この峠を徒歩でほぼ一日で越えている。鳩ヶ谷を朝六時半に出発し、「荻町城趾の右、とある坂路」から天生嶺に向かった。頂上から数丁下ったところで「陸地測量部二等水準点」を確認し、それには「鳩ヶ谷より一里十八町」「河合村天生へ一里三十町」と記されていたと記録している。その地点を過ぎて、天生の村落が見下ろせるあたりで午後一時となり、飲食店にて昼食。その後、雨が降り出して元田集落の手前の村社で雨宿りをするが、いっこうに止まないもので、午後四時頃、やむなくそこを出発した。「薄暮」頃に村社から一里三三町先の角川に到着して個人宅に宿を取った。鳩ヶ谷・角川間は「直行で四里三十四町」（「最近の計測では六里三十町」とも記録）で、鳩ヶ谷・高山間は「十三里足らず」としている。ただ、「道路の險悪」甚だしいことを指摘し、輸送が「夏秋に於て僅かに駄牛を通ずるも他は人背に依るのみ」という実情を憂えている。越中からの輸送に頼る白川村にとって、天生街道は、高山との距離的利便性から大変重要な道であり、「改修急務」と結論づけている。

ともあれ、鳩ヶ谷から角川までは、急がなくてもおおむね一日あればたり着くことができたようである。

峠の様子は次のように記されている。

萩町城趾の右、とある坂路を拾ひて、東面天生嶺に向ふ。一坂下り終れば萩町の内シタグソの部落、溪流に架したる獨木橋を渡れば又一坂、矗々と突つ立たる杉木立のあたり、天生谷川を左に、山脚を貫て細径草叢に通じて縷の如く、冷露珠を綴りて踏む足冷たかり。時に蛇あり、灰色の斑紋美しきが、蜷局まき居るを、危く一行の先頭梨坪氏に踏まれんとして、周章右の斜面へ逃れ去る、胴の廻り五寸長八尺に及びぬべし。波打つ胸を抑へつゝ板橋を渡りて數町、先鞭々の声を聞て、虻頗る多きだらゝ坂を登れば、老樹参差して昼尚暗き岩壚に斜に懸れるは大瀧（六八八米）高六間幅約一間、飛沫霧散して冷湿此処に夏なし<sup>⑨</sup>。

山道は溪流沿いに細く続き、足下の道は朝露で湿って冷たかった。やがて大きな蛇がとぐろを巻いていて、一行の行く手を遮った。先行の『高野聖』を意識した可能性がないとはいえないが、「波打つ胸を抑へつゝ」とやはり恐ろしい思いをして歩を進めたという。「だらゝ坂」では「虻」が非常に多かったと記し<sup>⑩</sup>、大きな滝があつたことも記録されている。

一行は、水に洗われて判然としなくなった道やぬかるんだ道に苦勞しながら、森の中を進んだ。

視界狭しと雖も亦壯觀たるを失はず。天生山の北溪より来る流に沿ふて、右へ木立深き狭谷を分け上れば、径は漸く急に、水に、奪はれて辨知しがたきもの頻々、左に涉り右へ擧つること幾十回、日光も洩さぬ大森林の内、虎杖延て一丈、羊齒亦五尺に及べるあたり、陰湿にして落葉交りの泥濘足首を埋む。登り終りて僅に下れば三條の細流潺々北流す、蓋し之等相集りて高瀧に至るものなりと、やがて頂上（一三三三米）<sup>⑪</sup>

頂上は一三三三メートルとあり、現在の碑に記されている標高とは異なるが、大森林の中、「陰湿」な道が続いていた模様である。現在も付近には湿原があるが、街道は溪流沿いを通り、全体として、大滝も有する湿潤な地域だったことが知られる。

### 三 作中の「天生峠」

『高野聖』の「天生峠」は次のように描かれている。

「天生峠」は、天候が不安定で雨が降りやすく「蒼空に雨が降るとい」い、「名代の」悪路であるうえに、まず蛇が現れたことが特記されている。

路がいかに悪い、宛然人が通いさうでない上に、恐いのは、蛇で。両方の叢に尾と頭とを突込んで、のたりと橋を渡して居るではあるまいか。（六）

宗朝は、かなり大きな蛇に何度も行くと手を遮られ、恐ろしい思いをした。うす気味悪い蛇をなんとかやり過ぐすと、深い森の中の道は「今度は蛇のかわりに蟹が歩きそうに草鞋が冷え」るほど湿润になった。やがて彼は、山蛭に襲われる。

鉛の重かとおもふ心持、何か木の実でぐもあるか知らんと、二三度振て見たが附着いて居て其まゝには取れないから、何心なく手をやつて掴むと、滑らかに冷りと来た。

見ると海鼠を裂たやうな目も口もない者ぢやが、動物には違ひない。不気味で投出さうとするとずる／＼と這つて指の尖へ吸ついてぶらりと下つた、其の放れた指の尖から真赤な美しい血が垂々と出たから、吃驚して目の下へ指をつけてじつと見ると、今折曲げた肱の処へつるりと垂懸つて居るのは同形をした、幅が五分、丈が三寸ばかりの山海鼠。

呆氣に取れて見る／＼内に、下の方から縮みながら、ぶく／＼と太つて行くのは生血をしたゝかに吸込む所為で、濁つた黒い滑らかな肌茶褐色の縞をもつた、疣胡瓜のやうな血を取る動物、此奴は蛭ぢやよ。（八）

降るように襲いかかる山蛭の描写は非常に生々しく気味が悪い。宗朝はたまた無我夢中で山蛭から逃れようと足早に長い「だら／＼坂」を下つた。橋を渡ると女の住む山家にたどり着いたのだつた。女は、溪流で水浴の介助をしてくれるが、その時、「此の水

は源が滝でございます」と奥深く大滝があると言い、「十三年前、お恐しい洪水」があつたことも語る。

その峠は、大滝、溪流など豊かな水を育むとともに、森は深く道は険しく、蛇や山蛭が出現する気味悪さがあつた。

こうした作中の峠の様子は、実際の峠と共通点が多い。たとえば、険路だつたこと、蛇に遭遇したこと、道が湿润だつたこと、雨が降りやすいこと、大滝・溪流があつたことなどである。特徴的なのは、実際の峠で「だら／＼坂」あたりで蛇が非常に多かったのに対し、作中の峠でもやはり「だら／＼坂」あたりで山蛭が出現したことである。山蛭と蛇とは、気味悪さの点では相違もあろうが、いずれも吸血しようと襲いかかり、旅人を悩ませたのは同じである。しかも、鏡花が友人吉田賢竜より聞いたところでは、出現するのはまさに山蛭である。また、「白川観光録」にはないが、吉田の話によれば、女の住む孤家も存在した。

こうして両者の峠の様子を比較すると、吉田の話として鏡花が書き留めているところも合わせれば、案外酷似しているのである。「天生峠」は意識的に聞知を踏まえた「實在」の峠が題材とされしており、意外にリアルなのではないだろうか。

#### 四 経路としての現実味

宗朝は、「飛騨から信州の松本へ出」ようと「天生峠」に入る。そこは、「超自然的な、一つの異界」、「現実の次元を超え」た奇

怪な世界だったとされるが、彼の旅の経路としても非現実的で架空というべきものだったのだろうか。実際の峠は、すでに見たように、白川から飛騨市河合町天生へと越えるもので、直接松本へは出ないのである。

しかし、「麻を刈る」の穂科や鏡花の上京のように、その旅を金沢を起点として考えたとき、どのように信州へ向かうのだろうか。すなわち白川村を経て信州松本に向かう場合、そのルートとして、天生峠を越える天生街道を選ぶことはあり得なかったのだろうか。

宗朝が旅した頃の飛騨についてみてみたい。『高野聖』は、周知のように三層構造となっている物語である。

物語の聞き手である「私」の話とそれに包み込まれた旅の僧の若き日の体験談、さらにその中で後半で「親仁」が語る女の生い立ちと洪水の話が内包されているというように。したがって当然のことながら作品の時間も敦賀の宿における第一の時間、その夜、僧が語った飛騨の天生峠における第二の時間、そしてそれより十三年前の時間と三重になっている<sup>12)</sup>。

「私」が宗朝の思い出話を聞く第一の時間は、遅くとも『高野聖』成稿の頃、すなわち明治三〇年頃と考えられる。その頃に「私」が出会った宗朝は、すでに四五、六歳になっていた。「僧」が語った飛騨の天生峠における第二の時間」は、彼が修行に勤しんだ若い

頃である。「お若いの」と呼ばれており、彼は二十歳前後だったのではなからうか。だとすれば、「天生峠」での体験は、第一の時間から二五年ほど遡った時期と推測でき、美女との出会いは明治初年頃だったということになるだろう。

明治初年頃の、宗朝が旅した飛騨は、まだ江戸時代さながらだった。とはいえ、廃藩置県によって、行政は新しい枠組みになっていた。明治四年から九年までの四年九ヶ月間は、飛騨国は信濃国と共に筑摩県に属した<sup>13)</sup>。飛騨と信州は、一時的に同じ行政区域となつて、県庁所在地は松本であつた。当然、信州松本と飛騨との往来は盛んだつた。松本は、飛騨国を越えた先にあつたから、飛騨・松本を結ぶルートが直結するように意識されたことがあつたとしてもおかしくない。

それでは、宗朝が旅した明治初年頃、白川村を経て信州松本に向かう場合、どのような経路をとるものだったのだろうか。

「麻を刈る」には、まだ、鉄道が敦賀までしか通じていなかった頃、金沢から飛騨越えをして松本に至り、東京へ向かう者がいたと記されており、金沢・飛騨・松本・東京のルートが存在していたようである。実際、信州では北陸の産物は飛騨から届いたとい<sup>14)</sup>い、金沢から松本に向かうならば、もっぱら飛騨経由だったのである。まず金沢から白川村に向かい、そこから飛騨の中心地・高山を通つて信州へ向かつた。白川から飛騨高山へは二経路あつた。白川街道を南下する清見村経由と、天生峠（天生街道）を越える古川経由である。ただし、天生峠は險路で名高く、白川街道

が利用されることが多かったという。<sup>(15)</sup>

このように、白川から信州へ向かうならば、経路の選択肢の中に天生峠はたしかに存在した。『高野聖』の時代、飛騨越えに天生街道をとるルートはあったのである。

高山から信州へも二経路あった。「野麦峠越えの野麦街道と安房峠越えの平湯街道の二本」であった。<sup>(16)</sup> どちらも飛騨から直接信州松本へ出る経路であつて、作中の「天生峠」は野麦峠か安房峠(信濃道)の方がふさわしいといわれる所以である。

野麦街道は、難所の野麦峠を越えなければならなかったが、明治四年の筑摩県道路等級は「飛騨往還(松本から野麦通り飛州高山に至る)」として三等であつた。<sup>(17)</sup> 道幅は九尺以上に定められ、「明治期には筑摩県庁の松本と高山をつなぐ県道」として、盛んに利用された。越中方面からの「塩」や「鰯」も運ばれたという。

一方、安房峠越えは、当時、一般的ではなかったであろう。一七九〇(寛政二)年に「平湯口は往来が少くないという理由で塞がれ」てしまい、一八三五(天保六)年、地元からの要望で再開されるも、やはり口留番所を置くほどの往来がなく、一八六二(文久二)年に再び塞がれたという経緯がある。だが、天生街道を用いた場合、越中東街道に入ってから信州方面に向かい、安房峠を越えれば、野麦街道を通るより相当距離が短くなる。「代替わり」した明治初期の旅人にとって、安房峠を越えて信州に至るという選択肢はあったのかもしれない。

宗朝は、「天生峠」に入る前に、村人に「これは五十年ばかり

前までは人が歩いた旧道です。やつぱり信州へ出ます、先は一つで七里ばかり総体近うござりますが、いや今時往来の出来るのじゃあござりませぬ。」と教えられた。「五十年ばかり前」は、『高野聖』の第一の時間から遡れば、安房峠が再び塞がれた頃と重なる。村人は第二の時間において語つたが、宗朝は「私」に第一の時間において物語っているからである。だとすれば、村人は、天生街道を進むならばいづれ安房峠を越えることになると察して、このように教えたと推測することもできる。

なお、安房峠と天生峠とは、「ぼ」と「も」の発音が近く、酷似して聞こえる名称である。いづれも険しい峠であり、鏡花は混同されることを期して、意図的に重ね合わせるように描いたのかもしれない。ちなみに、白川村・高山町間の道のりは、「莊川・清見」経由の白川街道より、天生街道の方が、およそ七里近かつたようである。<sup>(18)</sup> 『高野聖』において、天生峠(旧道)を行けば、「七里ばかり総体近うござります」とあるのは、行き先が松本ではなく、可能性のある経由地の一つ高山であつても、奇妙に一致する距離である。

むろん、作中では「天生峠」が新旧二つあったと解釈することもできるが、いずれにせよ、宗朝の旅を現実的に考えれば、当初は白川街道から野麦街道という経路を取る予定だったが、白川村から天生峠に入ってしまったので、それを越えて(おそらく安房峠経由で)信州の松本に行くという行程になったものであろう。

宗朝は、朝三時頃宿を発ち、六里ほど行って茶屋に立ち寄り、

まだ朝顔が咲いている時間であった。「売薬」に出会ったのもそこである。そこから「半町」ほどの「あと二里足らず行けば山になつて、それからが峠になるはず。」というところで、出水に遮られる。前に行く「売薬」は本道からそれ、「一条はこれから直ぐに坂になつて上りも急なり」(四)という脇道を登つていった。「白川観光録」に「とある坂路を拾ひて」とあるのとよく似た入り口である。それが実際の荻町城趾あたりと考えると、時間的に、宗朝は金沢方面からここまでさしずめブナ才峠を越えてきたくらの道のりを歩いてきている。

宗朝も「売薬」を追つて「天生峠」へと入つていった。険しいことは覚悟の上である。

勿論飛騨越と銘を打つた日には、七里に一軒十里に五軒といふ相場、其処で粟の飯にありつけば都合も上の方といふことになつて居ります。其を覚悟のことで、足は相応に達者、いや屈せずに進んだ進んだ。すると、段々又山が両方から逼つて来て、肩に支えさうな狭いことになつた、直ぐに上。さあ、之からが名代の天生峠と心得たから、此方も其気になつて、何しろ暑いので、喘ぎながら、先づ草鞋の紐を締直した。(一六)

飛騨越えでは「七里に一軒十里に五軒といふ相場、其処で粟の飯にありつけば都合も上の方といふことになつて居ります。」とい

うくらい人家がまれであると宗朝は「私」に語る。それは、かつて旅をしたとき(第二の時間)ばかりでなく、現在(第一の時間)でも七里や十里では飛騨越えは完了しないというわけである。

だが、すでに見たように、七里も行けば、鳩ヶ谷から角川まで至る。いわゆる天生峠そのものは越えられるのである。宗朝のいう飛騨越えは、それどころかなりの長距離を想定しており、安房峠までを含む、または野麦街道までを含めるものだったと考えれば、飛騨越えの現実に符合する。そもそも「天生峠」越えは飛騨越えそのものというより、その一部として描かれていると考えてよさそうである。

こうして、宗朝が信州松本に向かうために「天生峠」を越えようとしたことは、現実の天生峠としてもあり得ないことではなかった。むしろ至極当然のことだったのである。作中の「天生峠」は、安房峠との複層を解けば、ほぼ実際の天生峠の位置にあるものとして描かれたといつてよいだろう。

すでに見たように、蛇が現れた気味悪さ、険しくじめじめした道という、いかにも天生峠らしい様子も描写されている。鏡花は、「天生峠」を話に聞いた「実在」の天生峠にかなり忠実に描いている。山蛭の不気味さを加えて、次第に、恐ろしい世界へと誘われていく気配を漂わせるが、峠を本物とオーバーラップさせることによって、旅路の信憑性を高め、宗朝の思い出が実体験として受け止められるように仕上げている。「昔々の伝説ではなく、ほんのひと昔前に私自身が体験した実話です」と、宗朝は念を押し

つつ語っている<sup>20</sup>」という指摘もあるが、「天生峠」の本当らしき、天生峠の实在性が、実話だという位置づけをも可能にしているのである。「天生峠」はどこでもよかったのではない。明らかに天生峠が選ばれたのである。

しかし、宗朝が孤家の美女と過ごしたのは、たしかに「超自然的な、一つの異界」であつた。

## 五 「天生峠」の怪異

宗朝の物語には、いくつか奇異なところがあつた。

・山家の美女の世話をしている「親仁」は、「諏訪の湖の辺」まで馬を売りに行くが、一日で帰つて来た。実際の天生峠から諏訪湖はそんなに近くないはずである。

・売られる馬は、連れ出されることを嫌がつていたが、女にだめられると急におとなしくなり、あつという間に宗朝の眼界から消えた。

・森の動物たちが女に抱きつかんばかりにまとわりつき、夜中にはすさまじい気配がした。

いかにも不自然、怪しげであるが、最も奇妙なのは、女の行動である。

女は宗朝を泊めることを承知し、近くの溪流に連れて行くが、

「すっぱり裸体になつてお洗ひなさいまし」と宗朝の法衣を「すっぱり脱いで取」つて水浴させる。しかも、女自身も裸体となつて介助した。尋常ではない。見ず知らずの若い男に、女がこのような親切をするはずがない。不可解であつた。

しかも、宗朝は、恥じらいながらも身を任せ、次第に「気が遠くなつてひたと附いて居る婦人の身体で、私は花びらの中へ包まれたやうな」不思議な感覚に陥つていつた。

山家の者には肖合はぬ、都にも希な器量はいふに及ばぬが弱々しさうな風采ぢや、背中を流す内にもはツツと内証で呼吸がはづむから、最う断らうくと思ひながら、例の恍惚で、気はつきながら洗はした。

其上、山の気か、女の香か、ほんのりと佳い薫がする、私は背後でつく息ぢやらうと思つた。」

上人は一寸句切つて、（中略）

「さあ、然うやつて何時の間にもやら現とも無しに、慍う、其の不思議な、結構な薫のする暖い花の中へ、柔かに包まれて、足、腰、手、肩、頸から次第に、天窓まで一面に被つたから吃驚、石に尻持を搗いて、足を水の中に投出したから落ちたと思ふ途端に、女の手が脊後から肩越に胸をおさへたので確りつかまつた。

（中略）

（いゝゝ誰も見て居りはしませんよ。）と澄まして言ふ、婦人

も何時の間にか衣服を脱いで全身を練絹のやうに露はして居たのぢや。

何と驚くまいことか。(十五)

宗朝は、山蛭の傷も癒やされ、えもいわれぬ心地を体験したのである。

女は美しく、性的魅力さえ湛えて宗朝に接近した。妖艶な雰囲気、作中、最も幻想的な場面である。彼女が女と過ごした場所は、間違いなく「恐ろしい魔処」だったのであろう。

しかし、宗朝は最初からそのようなところだったとは明かさない。現世との境界を曖昧にしたまま、素知らぬ顔で語り続ける。女は、宗朝の眼前で魔法を駆使して、人間を獣に変えたり、「魔神」の姿を露わにしたりしなかった。「神変不思議の術によつて人間が暮やら蝙蝠やらに変身させられるさまが直叙され」ることではないのである。女は森の動物たちが近づき、抱きつくのを追ひ払つたりしているが、彼には恐ろしくも何ともなかった。それどころか、多少の不審を懷きながらも、彼女にうっとりし、「優しいなかに強みのある、気軽に見えても何処にか落着のある、馴々しくて犯し易からぬ品の可い、如何なることにもいざとなれば驚くに足らぬといふ身に応のあるといったやうな風の婦人」(十七)だという好印象を持った。森の動物たちに対するように邪険にされてはかなわないと、「おつかなびつくりで、おづく／＼控へて居たが」、彼女が「快く微笑みながら」話しかけてくれば、「いや案

ずるより産が安い。」と安心してしまった。しかも「この流れと一所に私の傍においてなさい」とまで言ってくれた。

だから、翌朝に一旦出立したあとも山家に戻ろうかと思つたというのである。別れの時、女は、「お名残惜しや」といい、「惜れながら、なほ親切に」道案内をして送り出してくれた。それを思うと、宗朝は、「傍につき添つて」とともに暮らし、またあのやうに水浴ができれば「其まゝ命が失せても可い!」とさえ思つた。

宗朝は女の手の中にあつたのかもしれない。だが、諏訪から戻つた「親仁」に出会い、ようやく正氣に戻つた。女のもとには「魔処」であり、彼女は「魔神」であると明かされ、たちまちすべての疑問が解かれていく。

嬢様は如意自在、男はより取つて、飽けば、息をかけて獣にするわ、殊に其の洪水以来、山を穿つたこの流は天道様がお授けの、男を誘ふ怪しの水、生命を取られぬものはないのぢや。天狗道にも三熱の苦惱、髪が乱れ、色が蒼ざめ、胸が痩せて手足が細れば、谷川を浴びると旧の通、其こそ水が垂るばかり、招けば活きた魚も来る、睨めば美しい木の実は落つる、袖を翳せば雨も降なり、眉を開けば風も吹くぞよ。

然もうまれつきの色好み、殊に又若いのが好ぢやで、何か御坊にいうたであらうが、其を実とした処で、聴て飽かれると尾が出来る、耳が動く、足がのびる、忽ち形が変ずるばかりぢや。

いや、鰓うがて此の鯉を料理して、大胡座おほのてうで飲む時の魔神ましんの姿を見せたいな。（二十六）

本当らしく語られてきた宗朝の体験談は、ここに至って一瞬のうちに幻想的な怪異譚へと塗り替えられる。<sup>(2)</sup> 見事な転換である。

『龍潭譚』（一八九六（明治29）年11月）の神隠しに描かれたような、主人公が異界に「行って戻る」物語が、ここでも繰り返されている。魔女が情けをかけて手放してくれた。「親仁」の言葉がそれを物語る。

妄念は起さずに早う此処を退のかつしやい、助けられたが不思議な位、嬢様別してのお情ぢやわ、生命冥加な、お若い、屹きつと修行をさつしやりませ。）と又一ツ背中を叩いた、

（二十六）

宗朝はもとの旅路、飛驒越えの現実世界に、身も心も回帰した。幻想世界への出発点と帰着点として、現実世界が存在した。「天生峠」が実在の天生峠と重なって持つ現実味が、彼の続きの旅を異界からの「帰還」と位置づけさせるのである。

## 六 おわりに

こうして、天生峠は、松本へ向かう宗朝の旅の経路としてはこ

く一般的で普通のルートをとったものであった。この点に虚構はなかったのである。しかも、作中の「天生峠」はその様子も「実在」の天生峠と酷似していた。意図的に「天生峠」を実際の天生峠とオーバーラップさせることによって、彼の旅が信憑性のあるものにされようとしているのである。繰り返しになるが、舞台は「どこでもよかった」のではないように思われる。やはり、飛驒の天生峠でなければならなかったのである。

ただ、「天生峠」は魔女の住む世界に通じていたわけである。恐ろしいことに、美女は「魔処」の「魔神」だった。虜となった宗朝は「嬢様別してのお情」で助けられ、もとの「天生峠」の旅の続きに戻ることができた。彼は、最後に「親仁」の言を借りてそれを告白する。その時、物語は、「そうだったのか」と彼の思い出が一瞬にしてファンタジーに塗り替えられる。大転換である。同時に、それまで曖昧だった、怪異の世界が現世と一線を画する境界が示されるのである。

この転回の起点は、魔界と対照をなす現実世界である。ある時点まで「天生峠」が実際の天生峠に忠実に描かれたことで、ここでの体験談を、怪しいけれども実話と受け止めさせる。最後に異界の物語だったと認識されたとき、その幻想性は鮮やかに際立ってくる。この大がかりな仕組みを支えるべく、「天生峠」は本物らしく、宗朝の旅は現実的に描かれたのである。彼が「行って戻る」現実世界の基盤は、天生峠の実在性にあるといえよう。「天生峠」が、飛驒越えて信州松本に向かう実在の峠として捉えられるべく

描かれた所以である。

別れ際、「私」には「次第に高く坂道を上る聖の姿、恰も雲に駕して行くやうに見えた」という。宗朝は、現実世界から「魔処」へ行き、戻った。この「魔処」の通過が、修行者にとつてのある種の禊だつたと「私」には捉えられたのかもしれない。

## 注

- (1) たとえば、田中勸儀「解説」(田中勸儀編『泉鏡花』『高野聖』作品論集「クレス出版、平成一五・三」三七五—三八〇頁。
- (2) 川口久雄「文学地理・高野聖」(『解釈』昭和三〇・一〇)。ほかに同様の指摘をするものとして、助川徳呈「雨の天生峠——泉鏡花『高野聖』——」(『漱石と明治文学』桜楓社、昭和五八・五)、松井幸子「奥飛騨天生峠の美女 泉鏡花の『高野聖』」(『ぎふの文学風景 美濃と飛騨』中日新聞社、昭和六一・三)、前田貞昭「天生峠『高野聖』(泉鏡花)」(『解釈と鑑賞別冊(近代名作のふるさと東日本編)』平成三・三)など。
- (3) 鏡花が、友人から天生峠について聞いていたというのは、知られているところである。たとえば、「鏡花の随筆『麻を刈る』」に、『湯島詣』の『篠塚』のモデルでもあり、鏡花の永い友人であった吉田賢竜が語った話がある。『一夏一人旅で、山神を驚かし、蛇を踏んで、今も人の恐るる名代の天生峠を越して、ああ降つたる雪かな、と山蛭を袖で払つて、美人の孤家に宿つた事がある』とある(注(2)前掲、助川徳呈「雨の天生峠——泉鏡花『高野聖』——」。
- (4) 周知のように、穂科信良は吉田賢竜だといわれている。たとえば、吉田精一氏の「高野聖」(『国語と国文学』昭和一〇・一〇)に「穂科信良とは、云ふ迄もなく先生の親友でもとの広島文理科大学長吉

- 田賢龍であらう」(注(1)前掲、田中勸儀編『泉鏡花』『高野聖』作品論集「一〇頁」とある。『日本近代文学大系7 泉鏡花集』(角川書店、昭和四五・一一)補注三六七、三八一など。
- (5) 岐阜県教育委員会『歴史の道調査報告書 天生街道・小鳥道』昭和五九・九、一頁。
- (6) 注(5)前掲、岐阜県教育委員会『歴史の道調査報告書 天生街道・小鳥道』五頁。「最近迄お助け小屋があつたという。調査の時期からすれば、昭和五〇年頃までそうした状況だったと考えられる。
- (7) 明治四三年九月高山新報連載、岡村利平『飛騨編年史要』(大正一〇・一一、住伊書店)所収「附録二 中村泰三小傳並に遺稿」。
- (8) 岡村利平を指す。
- (9) 注(7)前掲、岡村利平『飛騨編年史要』「附録二 中村泰三小傳並に遺稿」〇三七頁。
- (10) 明治四〇年頃の記録によれば、天生峠で牛馬を中心に襲いかかる蛇が多いことは有名であつた。「大なるは蝮の如し、(中略)中なるは蜂の如く小なるは蠅より稍大にして(中略)、音声を発すれば忽ち襲来」するので、天生峠を越えるときは口を聞かないよう一人ずつになつて行くか、夜行くべきだといわれるほどであつたという。
- (注(5)前掲、岐阜県教育委員会『歴史の道調査報告書 天生街道・小鳥道』五頁)
- (11) 注(7)前掲、岡村利平『飛騨編年史要』「附録二 中村泰三小傳並に遺稿」〇三八頁。
- (12) 東郷克美「『高野聖』の水中夢」(注(1)前掲、田中勸儀編『泉鏡花』『高野聖』作品論集「一〇二—一〇三頁」。
- (13) 注(7)前掲、岡村利平『飛騨編年史要』四三八—四五四頁。
- (14) たとえば、越中氷見で捕れた鱒は高山経由で野麦街道を通つて信濃国に送られた。信州で「飛騨鱒」と呼ぶ由縁である。(岐阜県教育委員会『歴史の道 飛騨野麦越中街道調査報告書』昭和五五・三、

一二頁。

- (15) 田中彰編『飛騨高山 明治・大正・昭和史』平成四・一一、飛騨・高山天領三百年記念事業推進協議会、一三九頁。また、大野郡白川村史編纂委員会『白川村史 全』昭和四三・一一、五五一頁。

- (16) 注(14) 前掲、岐阜県教育委員会『歴史の道 飛騨野麦越中街道調査報告書』一五頁。

- (17) 注(7) 前掲、岡村利平『飛騨編年史要』四四八頁。

- (18) 注(14) 前掲、岐阜県教育委員会『歴史の道 飛騨野麦越中街道調査報告書』一五頁。大正年間に上高地への観光が始まるまでは、安房峠は一般に使われる道ではなかった。

- (19) 「白川観光録」には、「白川村より高山町に至るに、莊川、清見を経由するときは二十里を越ゆるも、河合、古川を経由せば十三里に足らず。」(注(7) 前掲、『飛騨編年史要』附録〇四〇頁)とある。また、『白川村史 全』(注(15) 前掲) 五三五、五三七頁。

- (20) 鈴木啓子「泉鏡花『高野聖』論―その語りをめぐって―」(注(1) 前掲、田中勸儀編『泉鏡花『高野聖』作品論集』二四五頁。

- (21) 笠原伸夫「『高野聖』の神話的構想力」(注(1) 前掲、田中勸儀編『泉鏡花『高野聖』作品論集』二二六頁。

- (22) 鈴木啓子「泉鏡花『高野聖』論―その語りをめぐって―」(注(1) 前掲、田中勸儀編『泉鏡花『高野聖』作品論集』二五四頁。

\*なお、「白川観光録」の引用文は、便宜上、適宜新字体を用いた。『高野聖』の引用文は、東郷克美校注『新日本古典文学大系 明治編 20 泉鏡花集』(岩波書店、平成一四・三)によった。但し、ルビは適宜加除した。

(二〇一三年一〇月三〇日 受理)